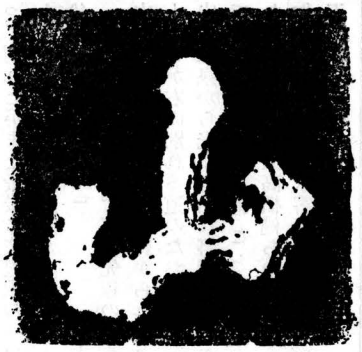
第399号 昭和53年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可



昭和53年（1978年）
9月号（No. 399）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

丹澤逍遙—山と人への思慕—（周布光兼）……（1）
昭和52年度年次晩餐会「この一本展」より……（2）
雪山登らざるの記—台湾紀行—（山口政一）……（4）
東西南北……（7）
有志閑談会（成瀬岩雄）
ヒマラヤンジャーナル復刻
自然保護情報……（8）
お知らせ……（9）
第11回図書交換会
第21回紅葉会御案内
図書紹介……（10）
ルーム日誌・会員動向……（11）
カット／松本慎太郎・梅谷隆三

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

# 丹澤逍遙

## ——山と人への思慕——

周布光兼

丹沢は決して標高の高い山ではない。伊勢原からすぐの日向薬師裏の小さな日向山に登っても眼の下に江の島が見える神奈川県の山塊である。家が横須賀だったり鎌倉だったりしたものでいつも非常に近い感じがしている。その証拠にはちょっと東海道線でも小田急でもに乗ろうと思えば晴れていればすぐありありと見える山並だ。そしてそのくせ意外に広いのだ。いろいろな所や山の頂がある。三泊も出来るかと思えば日帰りも出来る山だ。

山にはそれぞれの個性というか持味がある。丹沢にもあるが特に顕著なものがあるとも思えない。それなのに、一頃は遠くにも行ったがこの頃はどういうのか簡単に品物をリュックサックに詰めて、ついつい丹沢に足を向ける私だ。本当に気軽に行ける山だから。そのくせ何度も何度も行っても飽きない、いやだんだんに旧友のような気がして来るある性格を持ちながらも、付合っているといろいろな味のある山なのだ。

もちろん場所にもよる。季節にもよる。ちょっとたまには簡単に行きやすい低山のお話でもして見ましょう。

実は、はなはだ罰の当るような不遜なことだが、昔、私は丹沢を軽蔑していたのだ。海外、高山、そして近代アルピニズム。それと年齢。人生観。東海道線を通っていつも眺めたこの山並も、そこに住む人達のことも、大体タンザワという語呂も妙にピンと来なかったせいか、私はいつも心も体も丹沢を素通りした。そんな不遜な私だった。正直言って、そこに行き始めたのは昭和四十六年に日本山岳会の復活会員になってからである。当時は山と離れていたもので、まず足ならしに大山に最もポピュラーなコースでケーブルカーから山頂へ登りヤビツ峠から蓑毛へ下りたコースだった。そのくせ（先頃廃止した）ヤビツ山荘の下のちょうど雨で崩れた小道の横断に緊張したり、いまでは短い蓑毛までの道をずいぶん長いと思ったりした。今は六十三歳だが当時五十六歳である。

先程申し上げた通り、まず始めは大山のオーソドックスルートだったが、それはまず手近で山に体をならすためだったが、その次、駿河小山駅からあまり人の行ってそうもない不老山に行った。たかだか九三〇メートルの山である。しかし駅からは遠かった。水戸黄門の画面にでも出て来そうな電柱もない田舎道。そしてやがて登りとなって不老山。茅の茂る眺望の利かない山頂だった。だがその後がたいへん。途中から尾根通しと谷筋下りの道が分れている。私は茅のかぶさる道を避けて右に谷筋に下ったのは良いが間もなくすぐにフリー下降ではあぶないエグレスに出た。丁度鎖が下っているので下りて進むと今度は雨で崩壊した沢に出会う。もう岐れ道を下りてから三〇〇メートル位はあろう。「えいままよ」と一服つけてフッと見るとこわ如何に、さっきまで足場も見当らなかったづれた路の跡にポンポンと小さい岩のデッパリがあるではないか。良く見定めればちょうど一歩毎位の間隔で五メートル位の向うの切れた小路まで続いている。よし、私はやる気になって立上った。そして思いきり良くかつ真剣にそのデッパリの上を渡り終えた時の嬉しさ。詳細は省くが、あともう一度同じような所があって無事下山出来たのである。——そしてその下山した所が山市場という西丹沢の入口だったのである。それからが西丹沢に眼醒める始めである。

私はずっと山と高原地図シリーズのエーリアマップ、四万分の一の丹沢を使っているが、それにより今度は西丹沢のユーシンロッジに目をつける。県営であり写真によれば優秀であり、設備も良いようだ。そうだ、ここを足がかりに……と思い始め、二月十日にユーシンを基地に東へ塔ヶ岳を極め大倉尾根を下る計画に出発した。ユーシンまでの最初のトンネルは崩れていて河原から二〇メートルほどの梯子で登ってからトラバースしたが最後には雪が降って来た。その時ロッジ主の諸星さん（上高地の木村さんの昔とちょっと似ている）と出会って話した。ロッジはちょうど上高地の西糸屋の別棟のように立派だった。人も少ない

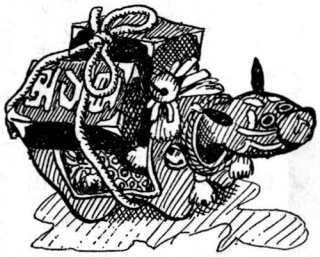
山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

せいか一部屋に悠々とふとんを敷いて寝られ、自炊もプロパンガスも水道も出て楽だった。翌日塔ヶ岳の西尾根から登ったのだが、朝ザンザ洞に行く二人連や同角沢に行く数人連と挨拶を交わし、そこが名にし負う難所の岩と氷の谷だけに印象が深かった。でも私は一人だった。とぼとぼとやがて西尾根に着く。そこからは二、三の踏跡はあったがラッセルの急登が続く。意外に時間がかかり昼過ぎやっと塔ヶ岳頂上に着いたのだが、今までの孤独とは打って変りカラフルな若い男女の姿と歓喜の声にはびっくりした。そして一休みの後、大倉尾根を下りたのであったが、下の方の岐れ道で若い二人連の男と会い、一服してる内に「俺の親父はまだ鋸岳に行くほど元気なんだ」などの話からいよいよ出発の時「同じ下るならジャンケンして、勝った方が好きな路を選ぼう」などと提案し「よーし、そらジャンケンポン」。結果は私が勝って別れたがまた最後に渋沢駅のホームでいっしょになった。「親父さんに宜しくなー」

次も西丹沢だった。だが先程の山市場からもっと上の神縄からユーシンが右に別れる道のなお奥、中川温泉から先の有名な箒沢山荘である。五月十八日のことだった。（山荘の主人高橋健ちゃんは知る人ぞ知る丹沢水害で流れた箒沢山荘を再建して今でも丹沢に生命をかける壮年である。）アルバムを見せて貰ったり話もはずんだ。夜は夜で河原で枝をたいて若い男女の二人と話したが、あげくの果に小瓶のウイスキー三本、水と共に空けて、世界中どこの人が聞いても意味不明のしかもその国らしき歌をわめいて八時頃寝入ったのも楽しいことであった。翌日は健ちゃんに教わって犬越路越えで相模線の橋本へ。途中の景色はスイス風のところもあったが特に右に犬越路道に入って間もなく鉄橋を渡った上から暫くの間の緑の萌え上がる美しさと力とには特にその緑と黒い影の対照に全く驚歎して見とれたものだった。これが自然だという喜びの内に急な斜面もいつしか通り一瞬犬越路の峠に出た時の心地良さ。風がまともに向って来ているのだ。汗もすぐひき、ジュースも素晴らしかった。峠にいる人達もやさしい乙女等数人と男のリーダーだった。昨晩いっしょに呑んだ若い二人連れは先に出発した由。やっぱり若さだなあと思う。でもそれ等一人一人の気持が伝わって来るような気がした。峠の避難小屋を見たりゆっくりして下りは北の長者舎の方へ向った。また会った、黒いYシャツの揃いの女性山岳団員数名、整然としてお立派だった。

さてそこで西と東の丹沢山について考える。そしてどのコースが一番行きたいのか。――まだまだ

## 昭和52年年次晩餐会
# 「この一本展」より（上）



昨年十二月におこなわれた年次晩餐会の折の、恒例の「この一本展」出品図書の解説を二回にわけてご紹介します。編集の都合により、暑かった夏もすぎて、やがて山から初雪の便り……という頃になってしまいましたが、珍しい本も多いこと故、この機会に改めて先達のすぐれた著作をひもとくきっかけとしていただければ幸いです。なお、出品各位には、解説原稿の掲載が遅れたことをおわびします（掲載五十音順）。

## 『高嶺の雪』
明治二十九年九月刊　落合直文著

### 野中　至翁　色紙　一枚

明治期の三大冒険壮挙の一つとしてひろく国民の血をわかした野中至の冬期富士山頂気象観測のための滞頂記を第一番に小説化（むしろ今でいうノンフィクションを本体としてまとめたもの）された『高嶺の雪』が世に出たのが、壮挙の翌年、明治二十九年のことである。

著者落合直文は、私のような明治生れの者にとっては愛唱した「孝女白菊の歌」の新体詩作家の先駆者として、またすぐれた国文学者であったことはご存じのとおりである。

著者がこの壮挙に感激してただちに、日清戦争直後の国民精神高揚に応えて、美文調にこの冒険と夫婦愛美談をいち早く一篇にまとめ世に出したことは、一般国民の要望にこたえ、今でいうベスト・セラーになったことは勿論であったと思う。

文中、氷雪の山頂小屋で扁桃腺炎の腫物をわずらった、妻の千代子を野中が荒療治をこころみ、三ツ目錐をとぎすまし、のどにつき立てる素人の手術の必死のしわざの描写がすさまじい。

野中至の公式報告書ともいうべき『富士案内』が刊行されたのがこの本が出てから五年経った明治三十四年であることから見ても、いち早く出た『高嶺の雪』が世にうけたかがわかる。だから、只今でもこの本の所持者も多く、「この一本展」に出すのは気がひけたが、私はあとで述べる理由で、晩年の野中至翁に色紙を書いていただいたので、これを添えてあえて一本展に出品した次第である。

わたくしごとになるが、私は終戦前後人生活をしていて、終戦直後の仕事は中央気象台（今の気象庁）に居て戦災を受けた気象官署の復旧建設の担当責任官をしていた。

富士山測候所の修復工事もその一つであった。公用で幾度か夏も冬も登頂した。

それが他人様から見れば、その熱情をくんで（こちらは好きで登っているのであるが）富士山測候所に縁の深い同僚のS氏が野中至翁は只今、逗子海岸で独居、仙人のような生活をされているが、書もなかなか良くされる。一つ君のために色紙を書いてくれとたのんであげよう、と言われてまもなく届けられたのがこれであ

ほんの端っこしか知らない丹沢となると、まずいわゆる主脈縦走と主稜縦走とが浮んだ。御承知の通り主脈は塔ヶ岳、丹沢山、蛭ヶ岳から姫次の線、主稜の方は前三者から桧洞丸の線であるが、ついにヒメツギから北へ抜ける主脈縦走に決めてある正月の三日間出かけた。午前中遅く渋沢から大倉に行った。それからとぼとぼと歩き続けた。いつか若者二人とジャンケンポンで路を変えた大きいベンチまで出た。さらに歩き続けてようやく駒止小屋に着いて一泊。急に降っていた雪も止み晴間が出て表尾根が大山まで見えた時は嬉しかった。翌日は堀山の家を経て花立小屋、塔ヶ岳から丹沢山、鬼の岩を経て蛭ヶ岳山荘泊の比較的無理のないコースだったが、花立小屋の手前の雪の上で寝ころんで何の音も聞えない静寂さが今でも心に残っている。丹沢山の頂上でコッヘルで作ったごちそうも、そして蛭ヶ岳山頂に達した時に野性の鹿がいっぱい居て私達登山者のビスケットを手から平気で食べた可愛さも楽しい思いは深い。翌々日はまず急坂を下って暫くすると急に原小屋の前に出た。両側には面白い沢も多いだろうがそこは静かな憩いの尾根上であった。次に姫次、ここは広い尾根のゆったりとした間の中間の小さな頂だった。やがて路は長者舎の右に行く路と分れてダラダラの長い路となり、避難小屋を右に見ていよいよ最後の焼山の頂に登り、東野（西野々）へ出た。

その間も、またそれから今までも丹沢には何度も行った。

東丹沢ではJACの集会に途中参加して菩堤峠から獣路状（けものみち）の所を下らされたこともある。あれから菩堤峠には二回ほど行っている。獣路状の例の路は通行封鎖の札が入口に出ていた。鍋割山には新しい靴ならしのため松田から一辺行った。大山周辺は実に歩いた。地図の大山あたりの路がほとんど埋まる位で、ある時は大山南尾根から鶴巻温泉駅まで長いハイキングもした。一緒に行った会社の若人が「これでもハイキングですか」と言ったほどだらだらと長かった。

西丹沢では箒沢山荘にはまた二度ほど行った。オリオンが最上で美しかったことも覚えている。ユーシンロッジも三回ほど行ったが今度は混んでいて三段ベッドに寝かされたこともある。ユーシンまでの約十五キロの片道の往復でも良い運動だ。箒沢山荘で教わって

## 「この一本展」より

る。まことに気品のある書風で、以来大切に保存させていただいている。（そのようなわけで至翁とは私は一度もお逢いしていない）。

登嶽如経世　（登嶽は経世の如く
除行達絶巓　除行して絶巓に達す）
昭和廿二年陽春為石川君
万千岳人書

（万千岳人とは野中至翁の雅号である）

なお、野中至の富士滞頂記を文章化されたのは五篇以上出版されたようである。最近のものは、数年前雑誌「太陽」に連載され、その後文芸春秋社から発刊された新田次郎の『芙蓉の人』であることは皆さんご承知の通り。

『高嶺の雪』も『芙蓉の人』も共に千代子夫人の『芙蓉日記』を大いに参考とされたようだ。『芙蓉日記』は新田次郎がその著書を作るとき、ご遺族、野中厚さんからその写本をお借りしたと書いておられる。

明治二十九年に出版されたらしいが、ご遺族のところにもないところを見ると、正に〝まぼろし〟の本であると思うが誰方かお持ちか？

戦後橋本英吉の『富士山頂』が出、映画にもなったが、やはり気象台で冬の富士山気象観測にも経験のあった新田次郎の『芙蓉の人』が更に進んで、感銘深く書かれていると思うがどうだろうか。

なお同氏の本の「あと書き」をこの小文をつくるに参考させていただいたことを付記したい。

石川治郎

小島烏水先生著作

### 『扇頭小景』二冊

烏水先生の著作は二十七八種と思うが『扇頭小景』は烏水を署名した処女出版である。明治三十二年五月五日新声社（後の新潮社）の発行で四六判一五四頁、表紙には中村不折が山茶花と落花流水の扇面散しを描く。序文二頁、目録と共に朱刷りである。定価二十銭。

今一冊は明治四十二年五月十五日文学同志会から出版の再版である。表紙も序文も異なり秋暁の烏水を憶う詩を添う。定価三十銭。

私のこの一本といえば烏水先生の『扇頭小景』をあげる。前の所有者も手製のカバーにおさめて大事にしていたことが偲ばれる。大分古い年神田の北沢書店で入手して珍重している。

亀田与三次

向井潤吉画帖『日本の民家』

一九六八年　保育社限定出版
野尻抱影讃序　署名入り

著者はいうまでもなく、古い日本民家を描いて第一人者である。制作は、現地で実物に相対して完成されるというから、労力も大変であろう。一九〇一年生れの高齢にかかわらず、制作旅行を続行されて、実に立派である。

本画帖に収録の図版は、原色刷りを貼った三十二葉と、グラビア三十四葉。画題の下に、制

畦ヶ丸の途中まで行ったこともある。

そして最近はヤビツ峠から北の札掛まで散歩してきた。また名も知らぬ小さなコブに登っても来た。冬は冬で雪、春は春で芽や花や鳥声、夏は輝く日、秋は枯れかけた草木などをバックに丹沢はそのいつも息づいていた。そして行き会う人も同行する人も話せば気持の良い人達ばかりのような気がした。箒沢山荘の二番目の小学生の男の子が私が箒杉の蔭にかくれるまでいつまでも「サヨナラー」と叫んでくれていたが今はどうしているだろうか。

＊　＊　＊

丹沢は今では私の懐しい庭のような気さえする。まだ登っていない山頂も、通っていない尾根も、特に単独行が制約して行っていない谷筋も実に多い。けれども気易い友達のような丹沢なのだ。たとえば木曽の御岳だって、もし事情が許し近くに居たら、あっちからもこっちからも登って見たいことだろう。また登って見たい。しかし事情もあったし、私には丹沢が得難い今の友達なのだ。失意の時にも私はあえて行く。そしてしばらくの活力をとり戻す。暇を見て遠い未だ知らぬ山、例えば会津駒ヶ岳や日光八丁湯から尾瀬に出る尾根にも今行きたい。でもそれは将来の期待として残そう。

アルピニズムを捨てたのではない。事情で、せめてもの楽しい山行や山の逍遥を楽しみ、自然を身近なものとして行く、これはその一つの姿なのだ。

山は生きている。これが実感だ。その生きた山、またその山へ入る多くの人達との行きずりながらも親しい接触。これが自分を惹きつけると共に、一つの山でも実に奥が深いということを言いたいのである。

## 雪山登らざるの記

——台湾紀行——

山口政一

三六九山荘での一夜が明けたが、小屋の外は相変らずの雨と風である。昨日ここまで登って来たときに比べると、時々、雨は強く降り、風もうなりをあげる。明らかに台風の前ぶれである。

とに角、三六九山荘までと、昨日はひたむきに登って来た。辛い急坂が過ぎて雪山東峰の三角点（三一九九メートル）に対面したときはホッとした。その頃から雨がはげしくなり出した。今日もそ

「この一本展」より

作地名が入っていて、山男には親しみ深い。奥多摩、遠野、磐梯、妙高、白馬、高千穂、白川郷という具合に、民家の背後に四季折々の山があって、寂びれた街道などと共に、旅情をそそる。

また「民家探訪」と題して、スケッチ入り約五十ページの随想があり、詩情ゆたかで、楽しい。西欧の民家を描いているうち、日本民家が最も自分の彩管に適したことを覚った、と著者は記している。

私がこの画帖を初めて見たのは、出版三年後、野尻さんの部屋においてだった。欄間には、向井氏秀作の一つ「御代宿初秋」（福島県、民家群で有名）があった。画帖は、出版社には勿論なかった。約一ヶ月後、私は思いついて、もし著者のもとに一冊有ったら頒けて頂けないか、を野尻さんから尋ねて頂くことにした。

速達便で画帖が送られてきた。向井さん取って置きの一冊で、しかも代金を取って下さらないので、私はご好意に甘んじてしまった。署名は、後日お願いしたのである。

川崎精雄

## 木暮理太郎の歌稿

木暮理太郎（一八七三—一九四四）が晩年短歌に興味をもち万葉集の研究にも手をのばされたことは、「万葉の山」なる一文のあることや、山の友人に贈った著書に美しい毛筆で自作の歌を書いておられること等により、ある程度は知られているが詳しいことは意外と知られていない。木暮さんの歌はほとんど「にひばり」という歌誌（昭和八年五月発刊、昭和十六年十二月終刊。通巻四十三号）に掲載されているが、その実力の程は昭和十三年に改造社が企画した新万葉集の第三巻に、十三首が選ばれて掲載されていることで推察することができる。この時の十三首はいずれもこの「にひばり」から選ばれたものであるが、このほかに七十六首の歌がこの雑誌に載っている。私が所蔵する歌稿「麦秋のころ」には十二首の歌が書かれているが、今のところ発表された形跡はあるが、掲載紙については全く不明である。

木暮さんの歌は、何といっても山での作品によいものが多いが、とかく短詩形なるが故の無理な字づめや難解さがなく、多発する感情を素直に余すところなく歌いあげているところに特徴があるように思われる。それは古歌の研究と豊富な体験、そして自然への限りない愛情の結晶であると私は思うのである。いつか美枝子様（木暮さんの長女）と木暮さんの歌について語ったとき、「いい歌ですね」と美枝子さん自身感嘆された「雁坂の峠路長し下り来て滝川谷に聞くは筒鳥」は、私のもっとも好きな歌で、お会いしたことのない木暮さんを目の当り見る心地がする。

この「麦秋のころ」は、技術的にはやや形式にとらわれ感情が出つくしておらず、小作争議の言葉などが出てくるところを見ると、かなり初期の作品かと思われる。

神原忠夫

長田秋濤訳

## 『西伯利亜蒙古旅行』

（明治三十三年六月、春陽堂）

長田秋濤訳『ヒマラヤ山探検』（明治三十三年八月、春陽堂）は、小林義正氏の紹介以来、わが国ではじめて翻訳されたヒマラヤ文献として名高いが、そのすこしまえにこの本が刊行されていることは、意外と知られていないようである。

その内容は、一八七三年十月、パリを出立し

の連続である。

昨夜は明り取り窓のれんじや羽目板の隙間から雨しぶきが降り込んで、シュラフを濡らせた者もいる。こんな天気では、れんじも明けられないので薄暗い中でじっと坐っている他はない。滞在ときまったので、気分的には少しのんびりしている。それでも食糧班は雨の中を別棟の炊事場に行き、朝飯をつくって、我々の所に運んでくれた。オジヤである。台湾にきてから朝はお粥に定まってしまった。行動しないのだから充分であるし、老人組は坐った侭で頂けるだけでも有難いのである。副食に日本から持参のジャコエモン、漬物、梅干、ハムにソーセージ、実にバラエティに富んでいる。楽しいおいしい朝食である。

朝食が終ると、今西先生（前会長）のアフリカの話、蒙古の話、御勢氏のマレーシアの談、水魚調査の話、蛇を食ったが固くて不味だった話など話題はつきない。

夏休みを利用しての中華民国政府の青少年錬成計画で、我々の後を追って登って来た青少年達もこの天候では所在がない。もっとも彼等は今日、昼飯後、登頂をあきらめて下山するという。その青少年達が今西先生のサインをもらいに集って来た。彼等は手に手にバナーを持っている。どうも中華民国山岳協会（以下中山協と呼ぶことにする）から付添に出ていただいた蔡さんの入智恵らしい。お蔭で僕までもサインさせられた。あまり希望者が多すぎて最後は人数を制限する次第ともなった。

政府はこの計画に資金を出し、食糧、宿泊は大体、無料らしい。交通費も半額という。

毎回五十人位の単位で交代している。昨日も僕等の到着と同時に前夜宿泊組が登頂を断念して下って行った。この小屋の管理人も寝具も彼等のためのものである。僕等の寝ていたところと簡単に板で仕切った小区画があって、そこには高山病でやられた彼等のうちの男女二人が居た。高木（泰）マネジャーが薬を与えていたが、蔡さんによると、くっついて、いちいちしていて下れない人だそうな。

ここで、蔡さんを紹介しておこう。台湾の登山には中山協から必ず付添がつく。リエゾンオフィサーというところか。心易く、蔡さんと呼ぶが中山協の副会長で蔡景璋氏である。年齢六十九歳ときくが、なかなかどうして年齢に似ず、実にかくしゃくたる山の猛者である。中山協幹部の中でも一番に強いのではなかろうか。六年前に、民国六十周年を慶祝して中山協で中央山脈大縦走を企画したとき、南下隊の隊長として、二十五日間にわたる長期縦走を成し遂げた方である。今西先生に敬意を表しての今回のご出馬である。思ったことはズバリ言われる。それで

## 「この一本展」より

てペテルブルグにはいり、ヴォルガをわたってウラル山脈をこえ、オムスク、イルマスク、バイカル湖から蒙古にはいり、ゴビの大沙漠を通過して、翌七四年四月、清国の北京にいたる旅行記である。半年あまりにおよんだこの旅行の経過や見聞が克明につたえられていて興味ふかいが、極寒の季節にこの大旅行をくわだてた原著者の意気さかんなありさまを読みとることができる。著者の名はヴィクトル・メーギャンとあるが、原著の題名はわからない。訳書には、福島安正が序文をよせ、今野愚公が付録として「西伯利亜鉄道」を書いている。

明治初年代にフランスに学び、かずかずの小説や戯曲を日本に紹介した長田秋濤の功績は大きい。そのかたわらの仕事として『西伯利亜蒙古旅行』『ヒマラヤ山探検』などがあったことは、外国の紀行文学導入の経過を知る上で、手がかりとなるものであろう。

近藤信行

WANDERINGS AMONG THE HIGH ALPS

by ALFRED WILLS

一八五四年のヴェッターホルン登頂をふくむこのウイルスの本は、三年ほど前の「この一本展」に渡辺公平さんから出品された。これも同じ第二版（一八五八年刊）であるし、改装本でもあるので、改めて出陳するまでもないが、わずかにミソといえば、著者ウイルスのサインが貼付されている点である。

渡辺さんは四十余年前に本郷で掘り出された由だが、これは昨秋ロンドンの古書店フランシス・エドワーズの本棚で見つけたもの。この店の名において、ウイルスの署名は本ものだろうと思って求めて来た次第。

ウイルスをスポーツ登山の開幕者とすることには、賛成しない史家もあるが、この一本が当時の英国登山界に与えた影響は大であった。

島田巽

BRITISH MOUNTAINEERS F.S. SMYTHE

BRITISH HILLS AND MOUNTAINS P. BICKNELL

BRITISH MAPS AND MAP-MAKERS E. LYNAN

この三冊はいずれも BRITAIN IN PICTURES という一般向けの挿絵入り叢書（百種を超える）に含まれている。一本展に並べるほどのものではないが、絵もきれいだし、著者の選択もなかなかよいので、戦後まもないころのロンドンで、松方さんと感心して買いあさった想い出がある。

スマイスは四十九歳の短い生涯に著書二十数冊を刊行しているが、この小著（一九四二年初版）などは見落されるおそれがある。だが、この一般向けの本も、ビックネルの上記の本（一九四七年初版）とともに、ちゃんと ALPINE JOURNAL に書評が掲げられ、スマイスは英国山岳会の創立を一九五四年と誤記していると叱られている。松方さんは〝日本にもこんな叢書が欲しいな〟といって、たしか岩波の〝図書〟に書かれたように思う。

島田巽

いてなかなか、ユーモアに富んでいる。

今回はもう一人、ご出馬願っている。林樹封氏である。中山協の常務理事で五十四歳。蔡さんよりは小柄だがやはり、がっちりした体格の持主で山には強い。上記の大縦走の際はサポート隊の隊長も務められた由。私にとっても、六年前の玉山登山の際ご一緒願った旧知の仲である。お二人共、日本語がお上手である。

もう一人ある。今回、わざわざ玉山山麓の東埔村からポーター（山朋と云う）五人の頭として加わってくれた王天定氏（五十一歳）である。年間、山行二百日という。この人も小柄だがたくましい。三十キロ近い荷物を背負っても平気で我々に付いて来る。口数は少ないが日本語も話せる。前記の大縦走の際は北上隊の隊長に随行して三十日の長期縦走をやり遂げ七彩湖で南下隊との合流を果している。この間に、南下、北上両隊では合せて三〇〇〇メートル以上の山顕を六十山踏破したという。

これに対して、我々のメンバーと言えば、今西前日本山岳会々長を総隊長として、いつもその登山に同行するメンバーで紅二点と云いたいが、やや、遠い女性二名を加えて全員九名である。

天候恢復までネバると定めて山朋二人にボーナスを与えて彼等のエッセン補給と七ケ山荘（海抜二四〇〇メール）にデポした食糧の荷上げをやらせる。

なかなか、キャッチ出来なかった日本の気象通報を高木泰夫マネジャーがうまく把えて、天気図を作ってくれたが台風4号はバーシー海峡から北上中で、台湾本島の予想針路の中に含まれている。（下山後わかったことだが、この台風は高雄に上陸して台中に進み、そこから東支那海にそれたが、その間に多大の被害を与えて行った）

そんな中でも、食糧班はキチンと昼食を配ってくれる。もったいない話である。食事が終ると話もなくなり寝る以外は手はない。窓が明けられないので部屋は暗い。雨は断続的に降る。情勢は変らない。そんな中を、台湾の青少年達は下山してゆき、暫くすると、また新手が登って来た。

下山する組の中には、靴下の上をビニール袋で包んでズック靴を履いている者がいる。うまく考えたものだ。雨具はポンチョが多い。台中からの登山パーティーで雪山を極め北峰を経て志佳陽社に下る（旧登山道）のを目指して来た四人組もあきらめて下山する。雪山は以前に登っているという。日本語が出来る。サヨナラと言って去って行った。蔡さんと心易く話していた。

夕方、山朋が戻って来た。梨山から台中へも花蓮へも共に崖崩れで不通らしいと云う。エッセンも

## 「この一本展」より

# 『ザイサンからハミを通り、チベットおよび黄河源流へ』（初版本）

ニコライ・プルジェヴァリスキイ著

ロシヤの不世出の大探検家ニコライ・プルジェヴァリスキイは彼の第五回目の中央アジア探検に出発しようとしていた。彼はすでに四度にわたり中央アジアを探検し、その延べ年月は九ヵ年四ヵ月、距離にして三一五五一キロにも達していた。

第五回目の探検行の出発点は中央天山の山中、伝説の湖イスィク・クリ湖岸にある村落カラコルであった。だが、カラコルへの道中その一帯に腸チブスが蔓延しているのを知らず、彼は川の生水を飲んでしまった。カラコルで重態に落ち入り、一八八八年十一月一日彼はその偉大な生涯を閉じた。時に四十九歳、未だ独身であった。

今日出品した著作『ザイサンからハミを通り、チベットおよび黄河源流へ』は、彼の第三回目の中央アジア探検（一八七九―八〇）の記録で、一八八三年にセント・ペテルブルクで出版された初版本である。

本書の冒頭に、

「私の数度にわたる中央アジア探検行を実現させ賜うた忘れ得ぬアレクサンドル・ニコラエヴッチ皇帝陛下を偲び、無限の感謝の意を以ってこの書を捧げる。

参謀本部陸軍大佐プルジェヴァリスキイ」

と献詞が記されている。

この第三回目の旅の出発点はザイサンである。ザイサンは現在のソ連邦カザフ共和国の東端にあり、中国新疆ウイグル自治州の北端に隣接している。ここからプルジェヴァリスキイはジュンガル平原を南下し、天山山脈を越えハミに出た。ハミから真すぐ南に向けて、荒野を横切り、砂漠を踏破し、数本の山脈を越えて、チベットの主都ラッサを目指した。

だがラッサの手前約二二〇キロの地点でチベットの軍隊に妨げられ、宿望の都ラッサに入ることはできなかった。彼はチベットの高山地帯で厳しい冬を過した。

帰路は第一回の踏査（一八七〇―七三）ルートをたどった。すなわち、定遠営を径て北上し、ゴビ砂漠を縦断しウルガ（現在のモンゴル人民共和国の主都ウランバートル）よりバイカル湖の南下にある露領キャフタに帰った。

この旅は第一次チベット探検とも称され、踏査距離は八〇〇〇キロにも及ぶ。この踏査行では野生馬を発見し、これに彼の名が冠されたことはあまねく知られている。

また本書の文体やその内容はプルジェヴァリスキイが探検家としての円熟期にあることを示しており、この探検記で彼は独自の紀行文型を完成したと言われている。この旅を成功の内に終えた彼は、ロシヤ地理学協会から名誉会員に推挙された。

なお本書には地図二枚、スケッチ一〇八枚、木版画十枚が挿入されている。

田村俊介

# A Voyage en Zigzag

Miss E.F. Tuckett

タケット（E.F. Tuckett）についてはいまさらここに説明することもないと思うが、その足跡の広いことについては、アルプス初期の登山者の中でも第一人者といわれており、その著書“Pioneer in The High Alps”は一八五八年から一八七四年までの登山記をまとめたものであり、登山経過を日記体に記したものや、旅先

武陵農場では入手出来なかったとか。乏しいが我々の一部を廻す。

夜になっても、風雨は相変らずである。山朋のもたらしたニュースをもとに、もう一度、計画を検討した。明朝も天気が悪ければ、思い切って下山と決まる。今西総隊長曰く、〝我々は、登山を楽しみに来た。こんな悪天候に無理することもあるまい〟。この言葉には異論があるかも知れない。わざわざ台湾まで来て、この弱気ではとの意見も出よう。だが、我々の年齢になると、そんな執念はない。今夜は、通路を隔てた向い側に移ったが、雨しぶきが吹き込むことに変りがなかった。

その夜、十二時すぎに起きたとき、どうした加減か、雨も風もピタリと止み、雲も切れていた。しかし喜んだのも束の間、すぐ風雨共に強くなり、扉が飛ぶ騒ぎもあった。

明けて七月二十六日、相変らず風と雨が強い。昨夜の決定どおり、下山にかかる。内で聞いたほど風は強くないが、雨はしきりと降っている。登った道を下るのだから気分的にも楽なのは当然だが、登りが辛かった急坂が、かくも苦にせずに下れようとは。雨の中だから腰を下して休むことも出来ない。七ケ山荘まで一気に下って少憩の後、武陵農場に戻った。

その夜は宋美齢が好んで泊る梨山賓館に泊った。中国式に丹塗に彩られた豪華な建物だった。

（一九七七・八・二八）

## 西北 東南

### 有志閑談会

成瀬岩雄

本会の年中行事の一つとして重要な、意義のあるこの会合は、一昨年まで永らく六義園で行われて来たが、先方の都合で昨年来、早稲田大学内大隈会館の中の大隈侯の庭園で行われるようになった。

実は私は早稲田周辺の雑踏の中に六義園のような静かな緑したたる若葉の美観はもはや求められないのだろうとの先入観で昨年はこの会には出席しなかったのだが——それはこの会の発祥地の清水谷皆香園時代の折角の印象をこわすのを恐れて——今年初めて出席して見てこの杞憂は全く私の誤解であったことは内心嬉しいことであった。まさか都内のこの頃のような濁った空気の世界にこんな昔のままの茸ブキの屋根の農家風の邸宅が保存されているとは夢想だにしなかったのだ。ここを会場にと紹介された会員、関根君一同に改めて敬意を表する次第である。

「この一本展」より

ら の友人への手紙、アルパイン・ジャーナルに寄稿したものをまとめて彼の死後にクーリッヂの手によって一九二〇年に出版されたものである。

この登山記のうち、一八六一年から一八七〇年にわたる登山旅行については、彼の妹の描いた美しい写真画集 "Pictures in Tyrol and Elsewhere" "A Voyage en Zigzag" および "Zigzagging in the Dolomites" の三冊が出版されており、その中の一つ、"A Voyage en Zigzag" をここに披露する次第である。絵図による説明というものは、写真による実写とはまた違った実感を表わすものであるだけに実に楽しい絵本である。各絵図の下に記されている短い説明文を併せ見ていると、時の経つのも忘れてしまうのだ。第三版としてあるから、当時相当の人気を呼んだのであろう。

永年、なんとかこの三著書中、いずれかにお目に掛りたいものだ……とは予而来、松方さんとも話していたことだけに、最近やっと入手できた喜びと共に、小生にとっては松方さんを追憶するよすがともなり、我が書架の至宝として日夜読みかつ眺めている次第である。

成瀬岩雄

### Lockende Berge
### 「魅惑する山々」

これは一九七一年に刊行された、ごく新しい本である。といっても、丸善や紀伊之国屋書店に注文しても手にはいらない。そもそも書店に並ぶ本ではない。チューリヒの出版社がブッククラブ会員を相手に予約出版したものだからである。山岳への啓蒙的入門書であって、内容にとりたてていうべきものがあるわけではないが、山書収集家の手に入りにくいという意味での価値であろう。

ところで、この本はもともと色刷り写真がクラブ員に別送され、読者は本をひもときながら一枚一枚指定の個所に写真を貼りつけていくようになっていた。一種の手づくりを楽しむ本であった。私にこれを呈してくれたスイスの某夫人は、山好きの日本人である私のために自分でせっせと写真を貼ったのである。日本で企画されてもよい面白いアイディアを紹介するためにも、この一本をお目にかけようと思う。

宮下啓三

### メイスン教授の手紙

ケニス・メイスンと言えば"Abode of Snow"の著者として、わが国でもよく知られていると思う。メイスンは一九七六年六月二日、八十九歳で逝去した。この手紙は、一九七五年春、邦訳『ヒマラヤ』の第二版を出版するに先きだち、同教授にその旨を知らせた私の手紙に対する返事である。

六十五年前に入会したACでは、最も古い会員の一人であり、ヒマラヤン・クラブの創立会員で生き残っているなかでも最も古い一人だということや、"Abode of Snow"の日本訳の再版刊行を非常に喜んでおり、ゴドウィン=オウスチンを知っていた唯一人の生存者であったろうとも書いている。

メイスンの字は実に美しく、何通か貰った手紙は、みなこのようなものである。この手紙が最後となったが、私にとっては手離しがたい一通である。

望月達夫

これで山岳会としても末永く昔の清水谷皆香園を偲ぶ会合を続けて行くことが出来るということは山岳会創立の大先輩に対しても申訳が立つと思うのだ。雨が降れば雨霞みに煙る庭園を眺めながら秩父や会津の山村に居るような気分を味わえるし、集まる仲間は老いも若きもお互いに心知れ合った連中ばかりだから特に堅苦しい思いはしない、正に一ぷくの清涼剤でもあるわけだ。

そもそも六義園の会合はその発祥の地、清水谷皆香園を思出す会を再会したいものだと、今は亡き神谷さんが戦後間もなく自ら率先して清水谷をわざわざ見に行かれたところ、昔の面影など全く見られない変転ぶりに驚かれて――今日ホテル・オータニのあるところ――どこか他に適当なところはないものかと探し廻られた末、六義園という好適な場所を見つけられて一昨年まで毎年新緑の頃、会合が続けられて来たので、とに角この会合はただの「親睦の会」だけではない「緑を楽しむ」「緑と語り合う会」であり、ひいては「木暮さん、田部さん」と云えば即座に秩父を思出すと共に本会創立当時の大先輩の風貌謦咳に接する、意義ある会合でもあったし、ただ、今は残念ながらこれ等大先輩はいずれも他界されてしまったので不得止ないとしても、依然としてこの会は山岳会としてもまことに重要な歴史のある会合であることは後に続く会員諸兄もまず念頭に置いてもらいたいものだ。飲んで歌って舞ったりする会ならいくらでもどこでも出来るが、この会のような降っても照っても、ただ、黙って静かに緑と語り合う会合なんていうのは、山岳会ならでは味わえない会合ではないか……。寄る年波の変化は不得止ないとしても昔あの清水谷の会場に集まった大先輩を知る者も少なくなり、何しろ木暮祭を「小暮祭」なんていう通知が出される現状は嘆かわしい限りだ。

先年、六義園での第一回の「清水谷皆香園を偲ぶ会」を催した時の田部さん、近藤茂吉さん、武田久吉さん、鳥山さん等創期会員を初め多くの旧い会員が逸早く出席されたのには神谷さんを初め我々当事者は皆、鬼の首でも取ったような気持で喜び合ったものだ。ある年には細雨に霞むあの茸ブキの小部屋に所秩きばかり膝を付き合せて集り雨の音に耳を傾けたこともあった。今だに忘れもしない……。第一回の時はちょうど、マナスル偵察隊を出した年だったと思うが、席上、今日位もうそろそろ快報が来るのではないか……それにしても早くからヒマラヤには異常の興味を抱いて居られた木暮さんが今日生きて居られたらどんなに喜ばれただろう……なんて云う話も出たのだ。

私はひそかに、彼のヒマラヤ登山の大先輩として自他共に許していたマルティン・コンウェーが低山の美しさ、懐しさを讃美した名著"The Alps"の中の"The Hills at Night""The Beauty of Rain""Climbing in a Mist"を思い出し（なおこの原書については小島烏水さんも夙に「山岳」第二号で書評を書いて居られるが……）、その頃は未だ東京も今のように大気の汚染されていない頃であったから緑の樹間をすぐるそよ風の甘いささやきを聞き、降るような星をちりばめた空のかがやかしさを讃美しながら帰途についたものだ。

それやこれやをあたかも糸をたぐるが如く次々に、洋の東西を問わず大先輩への聯想を起さすこの六義園の会合はますますもって山岳会、年中行事の一つの意義ある会合であることをここに会員諸兄に改めて認識を深めていただきたいと思うのだ。山岳会も最近は永年念頭の自前の室を持つようになった。役員諸兄の御尽力には敬意を表して止まないがここにぜひお願いしたいのは歴代会長の写真だけは従来の如く見やすい所に掲げておいてもらいたいと切望する次第である。時代の距りで不得止ないとしても、不幸にして木暮さんを初め山岳会の大先輩の風貌謦咳に接することの出来ない現在の若い会員諸兄も、写真でも掲げてあれば木暮さんを「小暮さん」なんて云う会員も少なくなるだろう。昔なら切腹ものだが……。

なお、最後に、来年以後の幹事さんにはぜひこの際「清水谷皆香園を偲ぶ会」と会名を変更して、

## 自然保護情報――

自然保護委員会では、大峰・白川又川流域の林道建設中止、並びにその自然保護について、先に奈良県知事あて要望を出し、回答を受けた（会報三九三号参照）が、なお二、三の点について疑義があり、再度疑問を呈した。以下にその全文および知事からの回答を掲載する。

昭和五十三年六月十六日

奈良県知事

奥　田　良　三殿

日本山岳会会長　西　堀　栄三郎

日本山岳会

自然保護委員会委員長　山　本　良　三

大峰・白川又川流域の林道建設中止、並びにその自然保護について重ねて要望

昭和五十二年九月　日付本会の「大峰・白川又川流域の林道建設中止の要望並びに質疑について」の貴見の昭和五十二年十一月二十一日付林道一〇七号によるご回答を感謝致します。また自然を保護する基本姿勢を堅持する貴県の方針には敬意を表するものであります。

しかし、なお、二、三の点について本会と見解の相違がありますので、下記の件について重ねて要望致し、且つ貴見を伺いたく存じます。

一、林道白川又川線の計画見直しについて

本件について貴回答によれば、伐採跡地の植栽計画のみであり、肝心の林道工事の凍結、中止に関する点が不明確であります。林道工事の自然破壊の大なる事を考慮すれば、凍結、中止は当然のことであります。また、中流域については大栂山を越える歩道の利用、一方、木材その他の搬出については架線にても可能であると思考されます。これらの点について強く再考を促すものであります。

二、林道白川又川線の災害について

貴回答3における林道災害状況については、貴県ではかなり楽観的な観察をされていますが、会の現地視察による見解とは極めて大きな

各位への通知、案内を出していただきたく、切に望むものである。

本年の有志閑談会は六月十七日行われた。出席者は左の通りであった。

渡辺公平、山崎金次郎、大田敬、関根吉郎、今村正二、藤井運平、金坂一郎、中川武、織内信彦、成瀬岩雄、川上隆、吉田久兵衛、宮下啓三、小原晴子、浜野吉生、大野俊夫、松丸秀夫、近藤恒雄、黒石恒、松本熊次郎、河野幾雄、鶴岡元之助、小林重一　（順不同）

## ヒマラヤン・ジャーナル復刻

ヒマラヤに興味と関心を持つ人にとって必携の雑誌といわれている「The Himalayan Journal」が復刻される。一九二七年に創立された「ヒマラヤン・クラブ」が年間会報誌として一九二九年に第一号を発行し、一九七七年（第34巻）まで刊行されている。バックナンバーは、いまではほとんど入手不能とされているが、このほど第1巻～第15巻が復刻された。定価は八五、〇〇〇円。問合せは東京日本橋丸善、仕入部まで。

## お知らせ

### 第11回図書交換会

恒例の山岳図書交換会の日程は左記の通りです。

**日時**　10月21日（土）午後2時（3時より抽籤）

**場所**　日本山岳会ルーム

毎回多くの会員からご協力をいただいておりますが、どうぞ本年もお手持ちの書籍・雑誌等のうちご処分予定のもの、または会のために役立たせていただける本がございましたら、一冊でも結構ですからぜひご出品下さい。

ご出品いただけます方は、締切日の10月5日（水）までに「出品書籍名・（希望価格）・会員番号・住所・氏名」をお書きそえの上、図書委員会までご連絡下さい。多少纏まった場合は近郊に限りお伺い致します。（地方の方につきましてもルームではいつでも受付け致しますので、おついでの折にご持参、またはご送付いただければ幸甚と存じます）　（図書委員会）

### 第21回紅葉会御案内

今回は古くから火防の神として信仰され、皆に親しまれている遠州の秋葉山で開催いたします。

**期日**　11月11日（土）～12日

**場所**　静岡県周智郡春野町秋葉山秋葉寺（三尺坊）

**募集人員**　60名　貸切バスのため満員になり次第締切。

**参加費**　六五〇〇円（浜松駅南口よりの交通費、懇親会費、宿泊費、翌日昼の弁当まで）

相違があり甚だ遺憾であります。

貴回答によれば、路肩、路面と分けておられるようでありますが、路肩の崩壊は明らかに被害であり、且つ路面の崩れ落ちた事実も添付写真によっても明白であります。

このように崩壊しやすい土質、地形の所に林道を開設しようとしている現実を卒直に認識される可きと思料されます。

三、白川又川流域についての村有林についても、買上げによる県有林への編入等により特別保護地区昇格の促進を計っていただきたいと思います。

また大台ヶ原ドライブウェイ地区における山陽国策パルプ株式会社の伐採跡地に対しても、その後の育林状況の一層の監視、指導の強化をはかり、国立公園指定の主旨に則って自然保護の実をあげられん事を切望致します。

申すまでもなく、吉野熊野国立公園は近畿の屋根として樹齢百年を越える巨木がそびえる広大な天然林が残された唯一の地域であります。この深遠広大な森林美、渓谷美を損うことなく国民的遺産として末長く子孫に伝えるのは、現代に生きるわれわれに課せられた重大な責務であります。ここに再度の要望書を提出すると共に、ご回答をお願い申し上げます。　以上

林道第七一号
昭和五十三年七月六日
日本山岳会　会長　西堀栄三郎　殿
日本山岳会
自然保護委員会委員長　山本良三
奈良県知事　奥田良三

「大峰・白川又川流域の林道建設中止、並びにその自然保護について重ねて要望」について　（回答）

このことについて、基本的には昭和五十二年十一月二十一日回答したとおりですが、重ねての要望について別紙のとおり回答いたします。

(1) 林道白川又線の計画見直しについて

前回回答いたしましたとおり、おおむね幅二十メートルを保護林帯として残置しつつ開設する予定であり、工事の凍結、中止は考えておりません。

本県に於ける林政の目標は「活力ある森林を造成し、豊かな農山村をつくる」であってその基礎づくりとして林道網の整備を位置づけております。

「林道工事の自然破壊は大きい」との貴見については、数年来路線の位置、工種、工法の検討を通じて、現在では自然破壊につながらない林道工事が技術的にほぼ定着してきましたが、なお、更に検討していきたいとしております。

従って、現在及び将来に亘って林道工事と自然破壊とは短絡しない見解であります。

また、大栂山をこえる歩道を利用して林業施業とのお考えですが、施業現場には徒歩で往復四時間以上も要します。

過疎による林業従事者の不足と老齢化を考えるときびしい御意見と思います。

林道は木材搬出のためだけの施設ではなく、豊かな森林を造成する人々の「通い道」であることを御理解いただきたいと存じます。

(2) 林道白川又線の災害について

本林道についての災害は県内の他の路線とくらべて、決して多大ではありません。

勿論、地形上、場所によっては難工事の所もありますが、貴見のように崩壊しやすい土質、地形の所に林道を開設しようとはしておりません。

**集合**　11月11日午前11時国鉄浜松町駅南口、出発11時30分。

（静岡支部　水野公男）

## 第7回ネパール研究学会

老若男女、アマ・プロ一体となって、会員の活動成果を多角的テーマで発表・討論し、ネパールを楽しく語りあいたいと思います。一般の方の参加も大歓迎します。

**日時**　11月18日(土)午後3時～同19日午後3時半。

**場所**　関西地区大学セミナーハウス　神戸市北区道場町生野字ロクゴ☎＜0795６＞(4)4391　※宝塚～会場間はマイクロバスで送迎。

**会費**　会員七〇〇〇円（1泊3食付、含懇親会費）、非会員八〇〇〇円、非宿泊者四〇〇〇円（含懇親会費）

**参加申込み締切り**　10月10日

**問合せ・申込み先**　京都府長岡京市長岡2―22―18（〒617）薬師義美☎＜075＞(922)9738

## 第2回JACノミの市

**出品をお待ちします**

＜**出品対象**＞山に関するもの。ガラクタから珍品・貴重品まで（販売価格の70％を提供者に還元）。

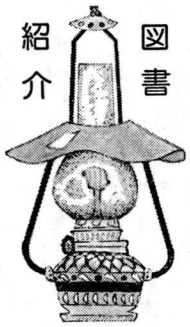
＜**出品方法**＞原則としてルーム持参（不可能な場合はルーム宛連絡してください。担当委員が頂戴にあがります）。なるべく希望価格をお示しください。

＜**出品締切り**＞10月10日（火）整理のつごう上、早めにお願いします。

＜**ノミの市開催日**＞10月28日(土)14時～17時日本山岳会ルームで。

---

## 図書紹介



**AFTER EVEREST**

**An Autobiography by TENZING NORGAY SHERPA as told to MALCOM BARNES**

本書は一九五三年五月二九日エベレスト山頂からはじまる下山以後の二十余年間の生活態度について、テンジン自身が語り、それをA・C会員バーンスが英文で綴ったもの。ネパール人のこの自叙伝を読みおわって、読んでよかったと思った。登山を中心にすえた国史と世界史のつながりを、味読できたのである。

バーンスの序文によればテンジンの本書出版目的は、子供たちに外国留学の資金をつくることと、故里ソル・キューンブ（ここ二十年間にはげしい社会的諸変化が起っている）の将来についての強い感情を述べることにある。テンジンとしては、本書の主題をエベレスト初登頂につづく遠征隊洪水とは別の新しい生きかたをとったことにおき、さらにシェルパ族はもとよりのことながらネパールにとってここ二十余年間の変化が、容易ならぬ（very serious）ものであることを第二の主題としている。

まず第一の主題は、ヒマラヤ登山研究所（H.M.I/The Himalayan Mountaineering Institute）の発想・創設・運営である。テンジンはこれに二十余年間の努力をそそいだのであった。

発想は友人ロビ・ミトラがはじめて提案した。一九五三年六月には西ベンガルのB・C・ロイ博士が再び提唱する（このことはハント本二三二頁でも注目されている）。一躍有名人になったテンジンは、政治家になれとか東西対決の英雄になれとの誘いをうけていたが、ハントの登山を固守せよとの忠告を胸にきざんでおり、彼はH・M・Iの創設についてネルー首相に語り、その絶大な支援を約束された。スイスの岳友も支援を約した。

かくてH・M・Iは一九五四年一一月四日ネルーによってダージリンに公式に開設され、インド国民の入学希望者にヒマラヤ地域の歴史・地理・地質・気象・植物等を教え、生徒は世界的視野にたつ山岳・登山・実技を学ぶこととなった。テンジンの任務は野外訓練担当理事であり、首相はこの施設を国立とし、千人のテンジン育生をテンジンに託した。H・M・Iのめざすことは、シェルパ族はもとより、広くインド国民に山岳美の認識と登山技術の向上を期待し、自国ならびに各国遠征隊への高度な協力、国民収入の向上、就職機会の増加等を実現することであった。

この職責遂行こそエベレスト以後におけるテンジンの新しい生きかたであり、一九七三年までに訓練した生徒数は四六二八名にのぼり、卒業生のうち七名が一九六五年エベレストの頂上を踏んだ。さらにテンジンも参加して一九六三年にシェルパ岳人協会を設立して、遠征隊を援助しかつシェルパの利益保護と補償の世話をする組織とし、メンバーをシェルパ族出身者にして有能なりとの保証書をうけた岳人に限った。これこそネルー首相が勧告した体制だったのである。

この二十余年間にテンジンは、各国の岳友や山岳会などから招かれて、欧州各国をはじめオーストラリア・ニュージーランド・アメリカ・ソ連・日本などを訪れているが、エベレスト初登頂の英国隊隊員や一九五二年のスイス隊々員との心温まる懇親会など銘記される催しが述べられる。その旅行範囲は文字どおり地球大であり、家族づれの旅が多い。これはH・M・Iの実地訓練担当のため、長く家族から離れて家をかえりみる機会の乏しいテンジンにとっては、なによりの一家団欒の時でもあるが、同時にH・M・I運営のための新知識や新技術吸収の機会ともなっていた。またニュージーランドではヒラリーとともに巡廻講演をこころみ、シェルパのための学校や病院の基金に一・四万ドルをあげた。

六十歳をすぎたテンジンは、一九七六年H・M・Iから引退することを決意した。これが本書の第二主題となる。

H・M・I創設当時、ロイ博士もネルー首相もこの仕事は生涯君の仕事だとテンジンに約束した。その二人ともすでに他界し、言葉だけで紙に書いたものは貰っていない。「私は単純な男だ、だから人を信ずるのみ」。しかしテンジンの給与はH・M・I創設の二十余年前と同額であり、H・M・I教師の俸給はテンジンが提案して改正されてきたが、自分自身の要求はしなかった。誰かがはからってくれるべきことで、自分から申しでることではないし、「私は乞食ではない」。そしていまや政府の規則によれば、年齢上から引退すべきであり、すでに引退して然

るべきであった、と告げられもする。「私に与えてくれた約束ごとに何がおこったのだろう」。

H・M・Iの公務員として長く故郷を離れていたが、いまそのソル・キューンブの谷には過疎化がすすみ、荒廃の姿がでた。この故郷の命運を注視せねばならぬ。人口は減少し、農地を耕す若者やヤクの放牧を看る少年もなく、結婚した妻は夫とともに都会に去り、豪奢なホテルができても就職口は少ない。人口の減少阻止、農業や牧畜業の再興、ヒラリーの建てくれた学校カリキュラムにチベット語科目の追加要望、旅行者増加による汚染対策等々がある。引退して故郷に小規模でも登山学校を建てよう。カトマンズから空路で三十五分、エベレストのベースキャンプ地へ歩行四日の距離にある故郷で、若きシェルパに登攀技術を仕込み、ヨーロッパ・アルプスを訪れるごとくエベレストを訪れる人たちに、よきガイドを準備しよう。七十歳までは登攀実地訓練が果せる体力が残っている。

まさにテンジン第三の人生は、積極的なる『帰去来辞』である—帰去来兮、田園将蕪、胡不帰。高地の牧草地でヤクを看守しつつエベレスト登頂を夢みた少年の日は去り、ダージリンに転じて若きシェルパ岳人として過した野心的な生活はエベレスト征服をもって終止符をうった。H・M・Iの目的達成についてネルー首相へ約したことは果した。「私は私の義務を果した。私は常に幸福な人間だった」と彼は述懐する。

本書の末尾で、彼はエベレストの頂上で云った言葉を繰返す。

——I am grateful, Chomolungma……

（柿原謙一）

昭和五十三年九月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 西堀栄三郎
編集代表 大森久雄
電話東京（261）四四二三
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

# 山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

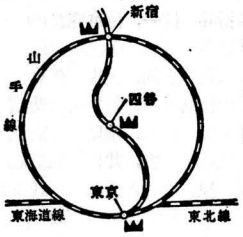
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番




四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

信用と知識を売る
山の専門店

登山用具は
ぜひ!

# 秀山荘

中央区八重洲2の1の11
☎281-8456

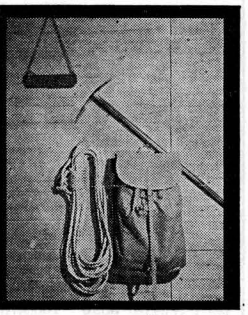
登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山・スキー用具の専門店
エーデルワイスマークの

# 好日山荘



東京店・中央区銀座3－5－7 ☎〈03〉(561)3600
スキーショップ ☎〈03〉(561)0966
吉祥寺近鉄店・吉祥寺近鉄7階 ☎〈0422〉(21)3331(代)
大阪店・北区曽根崎1－2－8 ☎〈06〉(364)0933(代)
梅田店・北区曽根崎2－7－2 ☎〈06〉(315)7985(代)
大阪三越店・北浜三越新館2階 ☎〈06〉(203)1331
セルシー店・千里中央セルシー1階 ☎〈06〉(833)0123
福岡店・博多区須崎町1－4 ☎〈092〉(281)3440

## 山の本

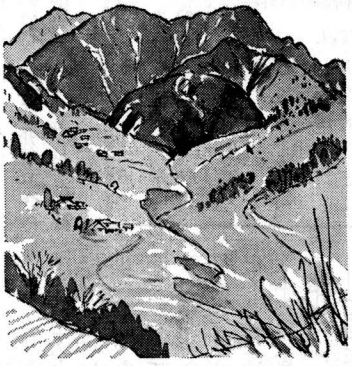
新刊

# 静かなる山

川崎精雄／望月達夫／山田哲郎
中西 章／横山厚夫 (共著)

B変型二一〇頁 写真一六葉 定価一、七〇〇円
あまり知られていない山々九七座の四季折々の紀行。図上で未知の山に思いを馳せるときに似て、沢歩きや、藪こぎ、雪上に道をさがす、あるいは見なれぬ角度から山を眺めるなど、忘れられがちな山登りの楽しさが味わえる。

●主な山名
前黒法師岳／山伏
矢倉岳／富士見山
達沢山／御神楽岳
御池山／太郎助山
未丈ケ岳／藤尾山
鍋割山／十二ケ岳
家老岳／オドケ山
大博多山／蓬田岳
窓明山／羽賀場山
神座山／大鳥屋山
台倉高山／大西山
吾国山／大木戸山
水ケ森／日本平山
土埋山／貂ケ森山
道志二十六夜山／ほか
甲州高尾山



売場ご案内

最新入荷の本・報告書
✠コーボルト（山形高等学校、山形大学山岳部同窓会）コーボルト会 2,500円
✠東ネパールの登山と調査（千葉大学東ネパール学術調査登山隊）千葉大学ヒマラヤ委員会 1,000円
✠ベルク シーロイファー（No.3 & No.4スキーアルピニズム研究会）850円
✠アラスカ（ディッキー峰、バリル峰登頂、およびルース氷河周辺試登と偵察）1976年、東京白稜会 700円
✠登山実技教本（日本山岳協会）700円
✠登山指導教程Ⅰ（日本山岳協会）1,200円
✠山恋いの記（村井米子）1,300円
✠画文草木帖（鶴田知也）980円
✠山みちで花に逢う日は(川口邦雄画文集)2,200円
✠西域をゆく（井上靖、司馬遼太郎）1,200円

茗溪堂 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。